

# 釜石湾の未来描こう

岩手日報

2007年9月8日



環境の視点から釜石湾静穏水域の活用策を考えたセミナー

## 振興局、市が希望セミナー

釜石地方振興局、釜石市主催のミナトマチ釜石希望セミナーは六日、同市の市民文化会館で開かれた。「環境」「産業」「まちづくり」の三つの視点から釜石湾の未来を考える三回シリーズの初回。約百人の市民が参加し、環境の視点から体験活動を通じた市民と海の共生の在り方を探った。

昨年七月に上部工を残り完成した釜石港湾口防波堤により、釜石湾内に約1000畝の静穏水域が生まれたことを受け、水域の活用を市民と考えるよう企画。東京大社会科学研究所の希望学プロジェクトが協力した。

初回は「釜石湾の環境について」研究・教育、環境保全および人々の交流のフィールドとして「がテーマ。東京大海洋研究所国際沿岸海洋研究センター（大槌町）のセンター長、大竹二雄教授が基調講演した。大竹教授は継続した水質調査の結果から「湾口

## 3回シリーズ、初回は環境 市民と海の共生探る

防波堤建設により海水の流れが停滞し、表層部と底層部の栄養塩の格差の広がりが低層部のヘドロ化の進行が認められる」など水質の低下傾向を指摘。一方で、植物プランクトン生産量の増加による海面養殖などの生産性向上も挙げ「環境収容力に見合った海面養殖を考えることが第一。産官学共同の取り組みにより、安心・安全の生産や環境教育の場の提供につながる」と環境調和型海面養殖のモデルを提案した。

パネルディスカッションでは、市内の学校や民間団体の環境教育、活動などを報告。幼少時から生物や自然環境に触れ、体験することの大切さを再確認した。

第二回セミナーは十月下旬に「新たな産業の可能性について」をテーマに開催する予定だ。